

子ども時代の戦争体験——心理学的調査から

森 茂起

甲南大学人間科学研究所所長・教授。専門は臨床心理学で、著書『トラウマ映画の心理学』（共著、新水社、二〇〇二年）『トラウマの発見』（講談社、二〇〇五年）『埋葬と亡霊——トラウマ概念の再吟味』（編著、人文書院、二〇〇五年）ほか。訳書 フェレンツィ『臨床日記』（みすず書房、二〇〇〇年）『ピオン臨床入門』（金剛出版、二〇〇三年）等多数。現在は、トラウマに強い関心を持ち、子ども虐待防止対策等に関わりながら、戦争について調査研究をすすめている。

研究の第一段階は二〇〇八年までで、二〇〇九年から第二段階に入っておりますが、細かくは省略させていただきます。今年度より尼崎市立地域研究史料館、神戸空襲を記録する会、養護老人ホーム、芦屋市立美術博物館といった団体と協力しまして、戦争経験者にアンケートをお配りし、インタビュに答えていただく形で進めております。今年度は二七名に参加していただいて、一八名の方がインタビュを受けてくださり、現在六名が終わった段階にきております。

戦争体験とは本当に幅広い体験で、もし一人の方が戦争体験をすべて語られると、おそらく何一〇時間かかっても語り尽くせないものがあるかと思えます。われわれの心理学的調

査においては、次のようなテーマをお聞きすることに絞っております。

一つは、最もつらかった体験です。最もつらかった体験の捉え方はご本人の考えで変わってきますが、われわれがトラウマ体験と呼んでおります、強烈でショックな体験がそこに含まれています。

二つ目に、家族状況と喪失体験。家族を失った、あるいは別離した経験。家族と戦争との関わりがどうであったか。

三つ目に、先ほどの高阪学長のお話とも関係しますが、軍国主義と家族の関わり、家族内で戦争についてどう語ってきたかなどの経験についてお聞きする。

四つ目に、戦後の生活。戦争との関わりを通じて、助けになった人間関係はどのようなものであったか。

最後に今年度からの調査で新しく加えた観点ですが、日本を加害国と考えるか、被害国と考えるかということについてです。今まで、戦争に関する体験を語ってこられた経験をどれくらい持っておられるかということも、今年度から伺っております。

少し具体的な内容をご紹介します。これらの内容をすべて網羅して、整理してまとめる作業はまだできておりません。進行中のインタビュの内容からいくつかをピックアップする形で今回はご勘弁いただきたいと思えます。今後さらに詳細に内容を分析していきたいと思えます。

例えば、最もつらかった体験として、Aさんは、中学一年時に終戦前日の京橋駅空襲の被害処理に三日間当たった経験

をあげておられます。死体処理の記憶や悪夢に苦しめられました。当日帰宅後母親に語った以外、その体験を誰にも語らず、戦争を考えるとその記憶が出てくるので避けてきたと言われました。例えば、成人して居酒屋に行つて軍歌が聞こえてくるとその記憶が出てくる。それがあまりにもつらいのでその店は避けるというふうに、思ひ出さないように努めてこられました。

Bさんは空襲時に母親と逃げる際に、腹部にけがをした男性が助けを求めるのを目撃します。そのとき、男性の内臓が外から見えていたという、残酷な場面を経験されています。防空壕の中での記憶も持つておられます。いずれも鮮明な映像が残っている。悪夢を見るといいことはないが、後々まで思い出すことはあつたと言われます。戦争体験のさまざまな中で、こういった強烈な印象に残る体験、ショックな体験というものが体験者にどのような形で残っているか。どう影響しているかということがトラウマ体験という観点です。

Cさんは疎開地での布団蒸しによるいじめられ体験を持っています。窒息しそうになり、命の危険を感じたほどいじめられたということです。この方は体力をつけて抵抗していくという形で何とか克服しました。ただ、布団蒸しされた経験の夢を長年見続けたということです。汽車乗車中に機銃掃射に遭つた経験も持つておられます。

Dさんは小学校に行く途中で機銃掃射の標的になります。小さな堀の中に身を隠してやり過ぎました。また、家の近くで弟といるときにやはり機銃掃射に遭い、慌てて家に逃げ

込むという、命の危険を感じる経験をお持ちです。

Eさんは、今までインタビュウさせていた中でただ一名、広島で原爆を経験された方です。小学校の校庭にて原爆を経験しました。距離があつたのでこの方自身は大きな外傷はなかつたが、姉は学徒動員の作業中で行方不明のままになりました。翌日の避難中に市内の惨状を目撃し、非常に残酷な場面を多数目撃された経験をお持ちです。

このように多くの方にトラウマ体験、それに起因します悪夢やフラッシュバックがあります。フラッシュバックは専門用語ですが、映像や感覚が鮮明に蘇える体験を意味します。こうした体験を多数を持つておられますが、意外なことに、「そういうこともありました・・」といったふうに、そのことが自分の人生にとつて大きな意味を持つたとは考えておられない方が今のところ比較的多い。ただ、先ほどのAさんは、空襲後の死体処理の体験のために自分は戦争を語れなかつた。それが大きく作用しているとおっしゃいました。

トラウマがどこまで悲惨であれば語れなくなるのか、あるいはそうでない場合はなぜなのかという問題は、これから考えていかねばなりません。こういう体験は多くの人がしているから、だから自分があえて語らなくてもという思いがあることも感じられます。

自分の体験ではなく、家族が受けたトラウマ体験が影響を与えているという方もおられます。

Aさんは、お兄さんが終戦三年後に帰還されました。かなり体調を崩しておられて、回復が遅れ、そして明るかつた性

格が無口になって、家族によれば全然性格が変わってしまった、というくらいに変わってしまった。戦地での体験（加害体験）を心の中に重く持っておられて、療養中にほのめかす程度に話されたけども、お兄さんを苦しませてはいけないう感じからか、その後家族で一切語られない。一度も話に出たことがないとおっしゃっていました。

それから、中国戦線での話を一度も語らなかつた父親。母親から、大阪の町を死体を分けながら歩いたという話を聞いたけれども、自分はそういうことを見た経験はない。このように、家族の経験を聞く、知ることがどのような影響を他の家族、あるいは下の世代に及ぼすかということも今後考えていきたいテーマとっております。

家族状況に関してはさまざまありますが、幾つか例を紹介しますと、先ほどのAさんは、お兄さんの病気のために家業を手伝うことになり、自分が夢を果たせなかつたという思いをお持ちです。Gさんは、父親が戦時中に、「絶対に勝つ」と言っておられた方ですが、負けて酒量が増え、ほとんど仕事をしなくなつた。長女のGさんが家計を支えることになり、弟の仕事の世話まで自分が責任を負うかたちになっていった。おじさんが戦地で亡くなつているが、これについては家族で話題に上らないといひます。このように、家族の戦争体験が話題に上らないという経験をお持ちの方は複数おられ、どうしてそうなのかということを考えていかねばならないと思ひます。

家財をほとんど失うとか、農地改革によつて戦後土地を失

つてしまうということも、戦争による喪失体験の中に含まれてきます。

家族に関する気持ちの中に、かなりの方から母親の苦勞への感謝の言葉が出てきます。母親が苦勞した。その苦勞を忘れてはいけないう。母親が、子どもを戦争の直接の惨禍から守るために、子どもに戦争の惨状を見せないように努力した。子どもの世代は、戦争の悲惨さから守られたわけですが、このような場合、子どもは親に聞かない。親が話さないことについてはあえて触れない。子どものほうが親を氣遣つて、あえて聞かないという気持ちがあるでしょうし、聞いて、その悩みに対して自分がどう対処すればよいかわからないという恐れから聞かない場合もあるかもしれません。また、今回のインタビューではまだ体験しておりませんが、子どもに多くの戦争体験を語つた親もあるのではないかと推測しております。そういう場合にはどういふことが起こるのかということも今後考えていきたいと思ひます。

軍国主義に対する家族の姿勢については、親が軍国主義に対してこのようであつた、とはつきり記憶に残つておられる方に今のところ出会つておりません。「絶対に勝つ」と親は言つていたが、他の大人から「負けるだろう」といふ話を聞いていた。父親の言うことはどうも怪しいと思つていたとの話をされた方があります。親がいた職場の関係で、軍人でも「この戦争は負ける」と語つていたのを知つていた方もあります。当然ながら、子どもは親だけから戦争を知るわけではないこ

ともにも注意すべきでしょう。全般に、軍国主義に関する親の姿勢は子どもに語られていない場合が多く見られます。インタビューをさせていた子ども世代の方には、「戦争体験からその後反戦運動に関わってきた方もあり、「戦争はいけません」と強くおっしゃる方も多く、全体として反戦的、平和主義的な考えをお持ちの方が多いように思います。

戦後の生活に関して、神戸の須磨海岸で戦後に自殺死体を何度も目撃した方がおられました。私自身、須磨に住んでいた時期がありますが、誰からも聞いたことがない話でした。食料不足や物資不足に関しては多くの方が語られました。最もつらかった体験として飢えの体験を語った方もあります。自分の飢えの辛さだけでなく、飢えによって人間が醜い姿を見せることにショックを受けたということです。

助けとなった人間関係もさまざまあるわけですが、学校や教師に関する体験が随分大きな意味を持っていると感じています。戦争をどう受け止めるかという上で、学校教育、あるいは先生との関係が、どのような意味を持っているかを今後考えていく必要があるかと思えます。当時の学校教育という全体の体制よりも、個々の学校や、個々の教師の姿勢によっていぶん体験が異なると感じます。親族の支えをあげられる方はこちらも何人もあります。

「日本は被害国であるか」という質問と、「日本は加害国であるか」という質問に対して、「はい」から「いいえ」までで答えていただく形のアンケートを行なっています。独立に尋ねていますので、両方「はい」と答えることも、両方「い

いえ」と答えることも可能なわけです。わかりにくいかもしれませんが、表で右上の6人のところは、加害国であるということに対して「はい」。被害国というほうに対して「いいえ」。つまり、日本は加害国であると答えておられる方です。これが全体の中ではやはり多いこととなります。しかし、黄色の部分ですが、5人とか2人になっている箇所は、加害国でもあり被害国でもある、あるいはどちらでもない、両者が同じ程度という答え方をされた方です。左のほうの緑の上の部分の2人は、どちらかと言えば被害国と考えておられる方です。

最初にドイツとの比較について申し上げました。同じ質問をドイツでしたわけではありませんが、おそらくドイツでは当然、「ドイツは加害国である」というところから出発して話が展開すると思えます。日本では、被害の面と加害の面が両立しているのが垣間見えるデータです。

詳しく考える時間がもうありませんが、日本が被害国であると感じる私たち、あるいは答えてくださった方の感じ方の背景には、あまりにも激しい空襲とか、原爆とか、兵士がひどい状況の中で戦ったとか、さまざまな要因があり得ると思えます。これはあくまで、こういうことが関係するであろうかという仮説です。時間の関係で先に進みます。

先ほども言いましたが、家族という人間関係が戦争体験を受け止める中でどのような意味を持っているかを、今後さらに考えていかなければなりません。戦争によって家族がちりちりになってしまったとか、天涯孤独になった方が、戦争体

験からどのように影響を受けておられるかについては、今までのインタビュアーでお聞きできていない部分です。そういう方にインタビュアーに応じていただくのは難しいと感じており、今後の課題です。

それから、自分よりももっと大変だった人がいるということで、自分の体験を語りづらいという方が多い。これも一つの戦争体験の受け止め方だと思います。多くの方がそういう感覚を持っておられる。もっと苦しまれた方、亡くなった方がいる、だから自分には語る資格はないという感覚を持っておられるように思います。

戦争に関しまして、農村部と都市部との対照があります。これは疎開の問題を扱うときにも出てきますが、地域によって体験が随分違うと感じます。教育の作用、男性と女性の受け止め方の違いも今後の主題となると思います。

今後、お一人お一人の体験を地域や社会階層や国籍という意味でどのあたりに位置づけるかを考えていかねばなりません。加害・被害という経験も、自分自身を被害者と考えるか、国を被害者と考えるかというあたりで、国家と個人の関係が問題になります。国は加害者だったけれども自分は違うと考えるか。こういう立場の捉え方は個人によって随分差があるでしょう。

研究の目的や方向性として、今私は三つの意味を考えています。一つは、戦争体験を受け継いでいくことです。それから、心理学の研究者としまして、体験を聞いて、どのような影響が残っているのかを分析していくことです。三つ目としまし

て、体験した方自身が語ることによって体験を整理することが進む。それを援助家するという意味合いもあるかと思えます。これは心理援助家としての役割です。日本では戦争に関して、あまり援助実践がありませんが、西洋諸国では戦争体験を文章で書くとか、本に書くとか、あるいは語るという形で体験を整理して自分の人生をまとめていくお手伝いを心理学の専門家やソーシャルワーカーが行なっている国があります。日本でも、今後考えていかなければならないのではないのでしょうか。

成果を踏まえての国際比較は、今後の課題として残されています。

時間が来てしまいましたので、この辺にいたします。画面に出しながら省略した部分がありましたがお勘弁いただきまして、私の報告を終わらせていただきます。

次に、先ほど申しましたように、東谷さんから疎開した子どもたちの調査を踏まえて、先生のお考えをお話しいただきたいと思えます。